上菅田中学校だより

第8号　平成30年12月3日発行
発行責任者　校長　関　恭雄

上菅田中学校　学校教育目標
◆学びを深め、実践力を養う
◆互いを認め、自分を伸ばす
◆豊かな心と健康な体をつくる
◆地域の一員、国際社会の一員
　であることを自覚し、行動する

地域防災拠点訓練～ペットの避難と段ボールの活用について学びました

１１月４日に上菅田小学校で実施された地域防災拠点訓練に防災ボランティアの生徒と一緒に参加しました。東日本大震災以降、震災時のペットの避難が課題のひとつになっていますが、今回の訓練では被災時に困らないためのペットの日ごろからの訓練の大切さや避難時に必要なペット用品について学ぶことができました。また、段ボールを活用したベッド作りや間仕切り作りを体験することができました。避難所用に設計された段ボールのベッドや間仕切りは想像以上の優れものでした。横浜市のいざと言う時の段ボールの供給や備蓄の体制がどうなっているのかが気になりました。

保土ヶ谷区個別支援学級合同宿泊学習

11 月 12 日から 1 泊 2 日で、保土ケ谷区中学校個別支援学級 8 校合同の宿泊学習が実施されました。イチョウ並木が美しい愛川ふれあいの村で、ディスクゴルフやキックベース、キャンドルファイヤーやカレー作りに、他校の生徒と協力して、楽しく取り組むことができました。

匠の授業　髙浪主幹教諭による国語の授業

11 月 14 日横浜市教育委員会が企画・運営する「『匠』の授業」訪問ツアーの一環として、本校髙浪裕子主幹教諭による国語の授業がおこなわれました。他校から参観に訪れた国語科の先生たちは、おだやかな表情や口調、ねらいをしぼった授業の組み立て、わかりやすく的確な指示、何気ない支援の手立て、無駄のない板書、辞書の有効活用等々授業改善につながる多くの技やヒントをつかむことができたようです。ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」を教材にした授業に 1 年 2 組の生徒たちは集中して取り組んでいました。すべての学習の基盤となる能力は言語能力であり、言語能力育成の核になるのは国語の学習であることを改めて感じた授業でした。

作文･標語等　受賞者

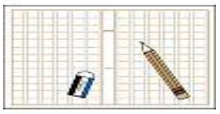
作文や標語等のコンクールでの受賞の知らせが続々と届いています。

☆日本新聞協会主催**「第 9 回いっしょに読もう！新聞コンクール」**
　奨励賞　1 年　**白井響**　『変わる食の楽しみ方』

☆**「税についての作文」**
　東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞　3 年　**竹原美空**　『「税込」？「税抜」？』
　法人会長賞　3 年　**秀岡彩音**　『幸福と税金』
　間税会長賞　3 年　**阿部功志郎**　『税金の使い道』

☆**「税の標語」**　全国間税会総連合会入選　3 年　**大隅征奈**　「税金で　未来を明るく　すこやかに」

☆**いのちの大切さを学ぶ教室　作文コンクール**
　神奈川県警察本部長賞　2 年　**齋藤美麗**　『命はつながっている』　（敬称略）



「書く力」を高めるためには

副校長　内田克弥

「どうすれば書くことの力がつきますか。」

国語科の教員として、生徒を前にしていた時、よくこのような質問を受けました。そこで、今回「書く力を高めるための方法」として、自分の考えを次のようにまとめてみました。

(1)色々な事柄について、自分の思いや考えをもつ。

学校で書く文章の内容は、国語の授業を含めて、大きくは「意見」「感想」の二つに分類できます。つまり、ある事柄に関して、「あなたはどう思ったのですか。どう考えているのですか。どう感じたのですか。」というようなことが問われる文章がほとんどなのです。そして、当然ですが、「なぜそのように考えたのですか。どうしてそう思ったのですか。」も同時に問われます。また文章の内容によっては、「では、どうすればいいのですか。どうすべきなのですか。」とか「ここから学んだことをどう生かしますか。」というようなことも問われることもあります。

このことから、書く力をつけるためには、色々なことについて、「自分の考え・意見」をもち、さらに「どうしてそうなのか。」ということを考えるのを習慣にすることがその第一歩だと思います。自分の考え、思いとその理由がはっきりすれば「書きたいこと」の芯もしっかりし、書くべき内容も見えてきます。

(2)文章の「型」を意識する。

文章を書く時、文章の「型」を意識しているでしょうか。考えの展開の仕方による分類として、小学校の時には「はじめ・なか・おわり」、中学校では「序論・本論・結論」(三段構成)、「起承転結」(四段構成)、また結論の位置による分類として、頭括型(結論が最初)、尾括型(結論が最後)、双括型（結論が最初と最後にある）など、文章の「型」について勉強してきたと思います。文章を書くときに(苦手な人は特に)「型」を意識してみましょう。「型」を意識することで、書くべき内容がはっきりしますし、話の筋道もわかりやすくなります。

(3)いい文章を読む。

例えば新聞のコラム欄。朝日新聞なら「天声人語」、読売新聞なら「編集手帳」。600 字から 800 字の文章ですが、その中で言いたいことをきちんと論理立ててまとめてある素晴らしい文章です。また、昔から「名文」と言われている文章をたくさん読んでみるのも、文章力をつけるのに役立ちます。ただ「読む」だけでなく、「この表現、おもしろいな。今度使ってみよう」とか「この書き出しいいな」とか、文章の「書き手」としての「視点」をもって読むことができるとさらにいいと思います。

(4)「語彙」を増やす。

多くの言葉を自分のものにし、使いこなせるようになると、より分かりやすく、表現力豊かな文章を書くことができるようになります。上菅田中学校の国語の授業では、一人ひとり国語辞典を用意し、難しい言葉や分からないことがあると、その場で、辞書で引くようにと指導しています。一見地味な取り組みですが、このようなことを繰り返すことで、語彙は確実に増えていきます。

「書く力」はこれを勉強したから、すぐに力がつく、というわけではありません。上で書いたことを意識して、継続して書くことに取り組むことで徐々に力がついてきます。一歩一歩進む気持ちで取り組んでいきましょう。

人権教育講演会――人権教育の一環として、毎年 11 月に行われている人権講演会。今年度は 11 月 21 日(水)の 5 時間目に、義足陸上選手の小林久枝さんをお迎えして、義足体験や質疑応答を交えながら、小林さんの病気や義足のこと、中学生の皆さんに考えもらいたいことや伝えたいことなどについて、小林さんの話を聞きました。子どもたちも小林さんの話に真剣な表情で耳を傾けていました。

「自分で考え、自分で決断し、そして自分で受け入れること」「障害と健常の境目は本当に薄い」など、考えさせられる言葉もたくさんいただきました。